回憶身影追隨蹤跡
馬淵東一紀念文集

面影を追憶し足跡を辿る——馬淵東一記念論文集
Recalling His Life, Following in His Footsteps: A Collection of Essays in Memory of MABUCHI Toichi

文｜廖彥琦（政治大學原住民族研究中心助理）
日語翻譯｜石村明子
圖｜編輯部

編　者：笠原政治
書　名：馬淵東一と台湾原住民族研究
出版項：東京，風響社，2010年12月

2009年適逢日本學者馬淵東一（1909-1988）百歲冥誕，仝年8月26-27日國立政治大學原住民族研究中心在台東國立台灣史前文化博物館舉辦了一場以「馬淵東一的學問與台灣原住民族研究」為主題的研究論壇。此次會議超過100多人參加，來自日本的與會者有30多名。

2009年はちょうど日本の研究者・馬淵東一（1909－1988）の生誕百周年にあたり、同年8月26日-27日に国立政治大学原住民族研究センターの主催で台東の国立台湾史前文化博物館にて「馬淵東一の学問と台湾原住民族研究」をテーマとする研究フォーラムが行われた。会議の参加者は100名を超え、日本からも30人以上が参加した。

馬渕悟教授於第二屆台日原住民族論壇中，將馬淵東一的珍貴手稿贈送給政治大學原住民族研究中心。

本書《馬淵東一與台灣原住民族研究》的內容，正是集結了上述論壇中的部分成果，以及仝年先於8月6日在東京進行的順益台灣原住民博物館助成第七回研究會中的研究發表。是在馬淵東一範圍廣大的研究成果中，以台灣原住民研究為焦點，從現今觀點加以再探討、再評價的論文集。

百年紀念 研究重新讀解

收錄的論文有9篇，執筆者包括在東京研究會進行發表的小川正恭、森口恒一、山田仁史，於台東研究論壇演講的松園万亀雄以及發表研究的石垣直、原英子，與兩場會議上都提出研究成果的笠原政治、野林厚志，另外再加上宮岡真央子的論文，與馬渕悟撰寫的出版前言、書末所

本書『馬淵東一と台湾原住民研究』は、上記フォーラムの成果の一部分、及びそれに先立ち同年8月6日に東京で行われた順益台湾原住民博物館助成第七回研究会での研究発表を集結したものであり、馬淵東一の幅広い研究成果の中でも台湾原住民研究に焦点を当て、今日の視点により再検討、再評価を加えた論文集である。

百周年記念　その研究を改めて読み解く

本書に収録された論文は9本あり、執筆者は東京で発表を行った小川正恭、森口恒一、山田仁史、台東でフォーラムの講演を行った松園万亀雄、および台東で発表を行った石垣直、原英子、さらに東京と台東の両方で発表を行った笠原政治、野林厚志、そして宮岡真央子である。また、巻初には馬渕悟の刊行に

政大原住民族研究中心

附的馬淵東一主要著作、年譜、索引，共300頁。其中在研究上曾受馬淵指導者有松園、小川、森口、笠原等4名。各執筆者的專長領域除致力於非洲研究的松園略有不同外，其他8名學者多是從事與台灣原住民族有關的研究，且各有豐碩成果，本書即是在此基礎上，試著讀解馬淵所留下的厚實著作。

本書收錄論文，順序如下：

篇名 / タイトル	執筆者
馬淵東一的作風 —— 台灣調查與其後的發展 馬淵東一の流儀 —— 台湾調査とその後の展開	松園万亀雄
「差距」的探求 —— 從擴大展開的調查方法談起 「ズレ」の探求 —— エクステンシブな調査方法をめぐって	小川正恭
《台灣高砂族系統所屬之研究》與其後 『台湾高砂族系統所属の研究』とその後	笠原政治
人類學者・馬淵東一與語言學 人類学者・馬淵東一と言語学	森口恒一
為研究用的博物館資料的收集調查 —— 馬淵東一針對台灣原住民族物質文化的社會人類學及歷史人類學興趣之兩個面向 研究のための博物館資料の収集調査 —— 馬淵東一が台湾原住民族の物質文化によせた社会人類学的関心と歴史人類学的関心の二つの側面	野林厚志
荷蘭民族學・宗教學與台灣原住民研究 オランダ民族学・宗教学と台湾原住民研究	山田仁史
馬淵東一在布農族研究史的定位 —— 其特徵、問題點、可能性 ブヌン研究史における馬淵東一の位置 —— 特徴・問題点・可能性	石垣直
馬淵東一的鄒族研究素描 馬淵東一のツォウ研究素描	宮岡真央子
Pangtsah族與Ami族 —— 探究民族名稱表記變遷的馬淵東一的台灣原住民族研究的觀點 パングツアハ族とアミ族 —— 民族名称表記の変遷にみる馬淵東一の台湾原住民族研究への視点	原英子

《馬淵東一と台湾原住民族研究》的內容，集結第二屆台日原住民族論壇的部分成果。

由於馬淵東一進行原住民族調查多是集中在戰前1930年代（包括就讀台北帝國大學 [1928-1931] 與擔任仝校土俗人種學講座囑託 [1931-1935] 、南方人文研究所助教授時期 [1943] ），其研究所獲，在社會人類學的結構功能主義影響下，對於各民族集團（特別是布農族、鄒族、阿美族）的遷徙歷史、地理知識、社會組織、宗教祭儀、禁忌習俗等的舊慣世界有一較

よせる言葉、巻末には馬淵東一の主な著作、年譜、索引があり、300ページに及んでいる。執筆者の中で馬淵から指導を受けたことがあるのは松園、小川、森口、笠原の四名である。各執筆者の研究分野は松園がアフリカ研究専門と多少異なる他、残りの8名は主に台湾原住民族関係の研究をしており、実績も多く、本書はそれを基礎として、馬淵の残した豊富な著作を読み解こうとしたものである。

本書に収録されている論文は順に次のとおりである。

馬淵東一が原住民族調査を行ったのは戦前の1930年代（台北帝国大学［1928－1931］在学時代および同校土俗人種学講座嘱託時代［1931－1935］、南方人文研究所助教授時代［1943］を含む）に集中しており、その研究は社会人類学の構造機能主義の影響を受け、各民族集団（とりわけブヌン、ツォウ、アミ）の移動史、地理的知識、社会組織、宗教祭儀、禁忌などの旧慣の世界において完全さ

政大原住民族研究中心

完整清晰的呈現。但與馬淵進行調查同一時期，也正是原住民族社會在國家統治政策下急速變化的階段。在馬淵的論文中，有關此一時期的變動一直到戰後1950年代才進行發表。

對於學問體系的思考

在馬淵留下大量的田野紀錄前，過去對於原住民族社會的瞭解多是零散且較欠缺客觀角度的描述，因此馬淵在台灣原住民研究中，一直是居於權威者的地位。但隨著戰後局勢的遽然變動，民族意識漸趨高漲，在馬淵著作中的「傳統」社會似乎也漸被現代化潮流淹沒，加上致力於原住民族社會研究者，已有不少是出自台灣民族學、人類學訓練的年輕一輩，或對戰前的舊慣世界陌生，或礙於不諳日本語而造成無法瞭解過去資料的隔閡，在承繼馬淵留下的研究中，我們與日本方面，似乎是朝著不同的道路發展。

從「馬淵東一百年風采」研究論壇到本書《馬淵東一與台灣原住民族研究》的出版，日本學者透過閱讀古典，並在物換星移的新世代中試圖重新探討過去田野資料或研究方法上的意義，不僅再再顯示出馬淵專心致志投入原住民族社會研究的可貴，亦是朝著構築漸形完備的學問體系之路前進。對於置身台灣的我們，除了專注於當下的民族現況外，是否也能在過去研究者所累積的基礎上，賦予其新的價值與歷時性的意義，值得我們靜心思考。◆

や明晰さを呈している。しかし、馬淵が調査を行った時代は、原住民族社会が国家の統治政策の下で、まさに急速に変化している時期でもあった。この時期の変動について馬淵が論文で発表したのは戦後の1950年代に入ってからのことである。

学問体系に対する思考

馬淵が大量のフィールドワークの記録を残すまでは、原住民族社会についての理解は断片的で多少客観性に欠ける描写が多かったため、馬淵は原住民族研究において、常に権威的な地位を保ってきた。しかし戦後の情勢の急速な変化や、民族意識の高まりにより、馬淵の著作にある「伝統」社会も現代化の潮流に呑み込まれてしまったように思われる。さらに原住民族社会研究に力を入れている者の中には、台湾の民族学・人類学による訓練を受けた若い世代も少なくなく、戦前の旧慣世界に対しては疎遠であったり、日本語がわからないため過去の資料が理解できなかったりなどの溝があり、馬淵が残した研究の継承という点では、我々と日本の学界では違う方向に発展しているようである。

「馬淵東一・百年の風采」研究フォーラムから本書『馬淵東一と台湾原住民族研究』の出版に至るまで、日本の研究者は古い文献の読解を通じて、世の中が移り変わった新しい世代において、フィールドワーク資料や研究方法における意義などについて改めて検討しており、馬淵が原住民社会研究の投入に専念したことの貴重さを示したうえに、完全な学問体系の道を構築し徐々に形成していく方向へと向かっていった。台湾にいる我々は、現在の民族の状況に注目する以外にも、過去の研究者が積み上げてきた基礎に、新たな価値と歴史的な意義を与えることができるのではないか、ということは熟考するに値するかと思われる。

政大原住民族研究中心